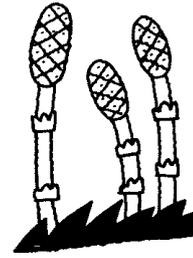


音の散歩路



～葛飾・柴又、矢切から野菊のこみちへ 川風散歩～

山手線の日暮里から京成電車に乗り換えて八つ目で高砂駅に到着する。同じホームから京成金町線に乗り換えて一駅で柴又である。映画「男はつらいよ」で全国に名が知られた町であり、猫の額ほどの駅前広場では寅さんが妹のさくらが追って来ないかと帝釈天参道の方を振り返っている（写真-1）。ここですでに映画のテーマ音楽が頭の中に流れ出す。二百メートルほどの参道を散策すると帝釈天の入口である二天門が見えてくる（写真-2、3）。帝釈天は日蓮

宗のお寺で題経寺という。寺内に足を踏み入れて帝釈堂の周囲に彫られた彫刻を見ていると「エイヤサー」と元気に声を張り上げ張り上げ



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4

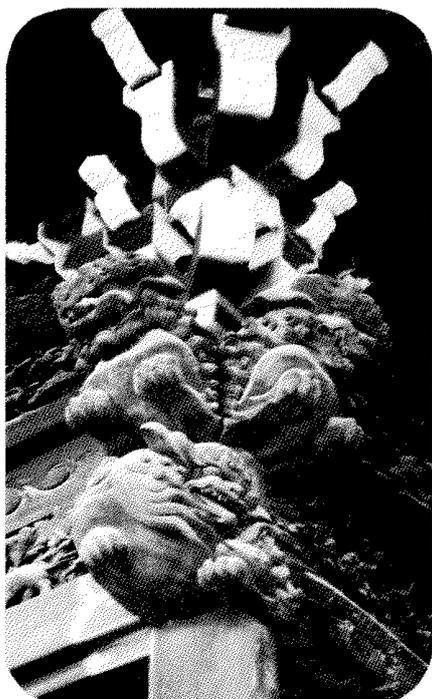


写真-5

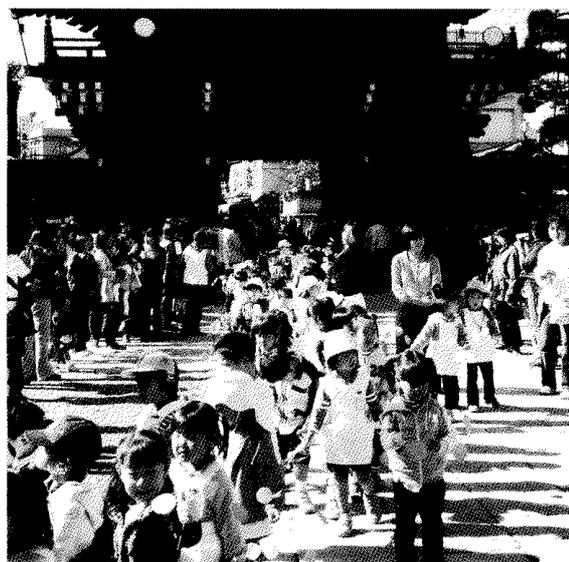


写真-6

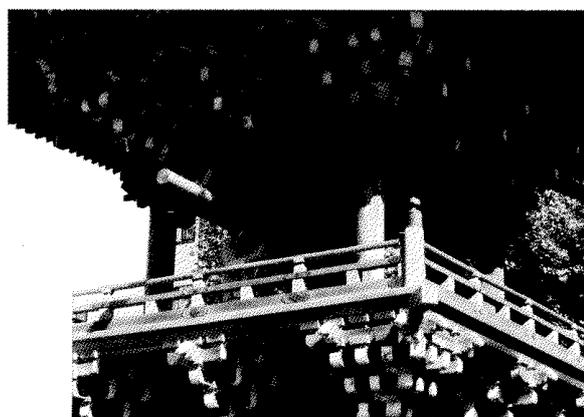


写真-7

幼稚園児の列が二天門をくぐって来た（写真-4、5、6）。しばらくするとグワーンと荘厳な鐘の音が鳴り響いた。二天門脇の大鐘楼堂の釣鐘が正午を知らせているのである（写真-7）。帝釈天界隈の参道の呼び込み、参拝客のざわめき、梵鐘の響き、そして、このあと訪れる江戸川堤の鳥のさえずりは日本の音風景百選に選ば



写真-8



写真-9



写真-10



写真-11

れている（写真-8）。

帝釈天に沿って江戸川方向に向かうと寅さん記念館がある。実際の撮影に使用したセットやシナリオ、ポスターが展示されていて寅さんファンは必見である（写真-9）。記念館の出口からすぐに江戸川の広い河川敷に出られる。堤のサイクリングロード沿いに朽果てた舟がわすれものの様に置いてあった。何代か前の渡し舟

であろう（写真-10）。

堤の草の絨毯を降りて行くと渡しの乗り場がある。ご存知矢切の渡しでありこんどは演歌の世界に浸ることになる。都内に残っている唯一の渡しである。なぜか、いなせな若い衆が……と見ると写真の撮影であった（写真-11）。渡しの始まりは江戸時代初期で、箱根と同等の関所を設置して行き交う人を取り締まっていた

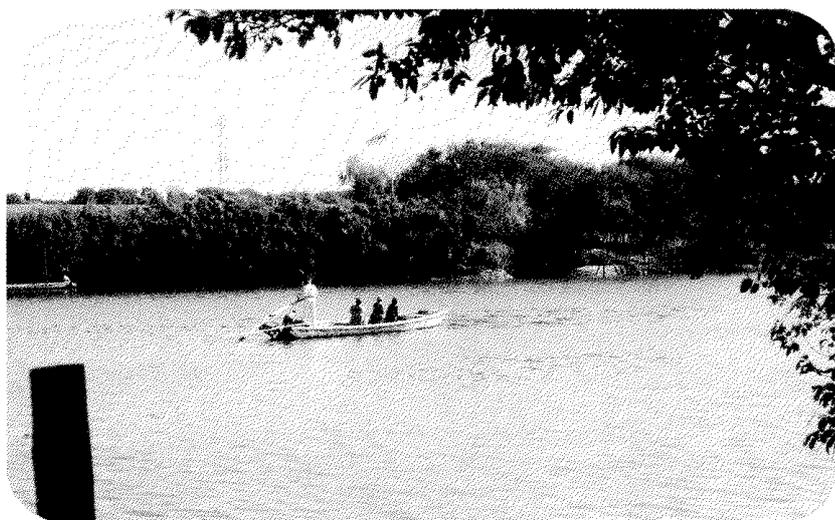


写真-12



写真-13



写真-14

が、関所やぶりは礫の世の中でも川の兩岸に田畑をもつ農民は自由に渡船ができたという。

百円を払って乗り込めば、対岸の千葉県松戸市下矢切まで川幅百メートル程、五分少々の舟遊びが味わえる。櫓が軋む音や舟先が水を切る音もなく川面の風に吹かれてゆったりと進む。アメンボの気分である。川の真ん中ではユリカモメが晴れわたった青い空から川面に向かって流れるように白い曲線を描く。松戸側は水深5メートル、「就航してますよ～」という合図の

旗が翻っていた（写真-12）。

舟から上がって堤を登ると音風景百選の記念碑がある（写真-13）。いくつかの孔が空いていて耳を近づけるとポウウォーと川風の音を聞ける。そして堤を降りると「野菊の墓」の本が開いていて野菊のこみちのはじまりとなる（写真-14）。その後は標識を辿りながら進めばよい（写真-15）。田やねぎ畑に挟まれて田舎路を歩くこと二十分、最後によこらしよと丘を登るとそこが伊藤左千夫の文学碑がある西蓮寺

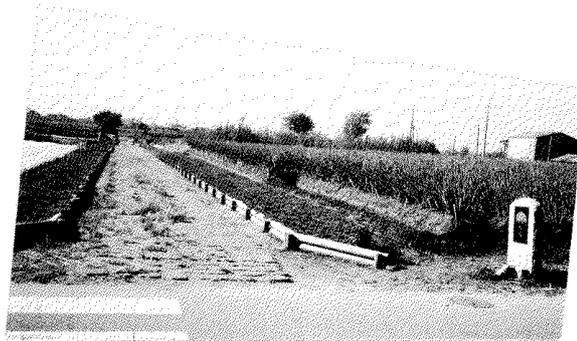


写真-15

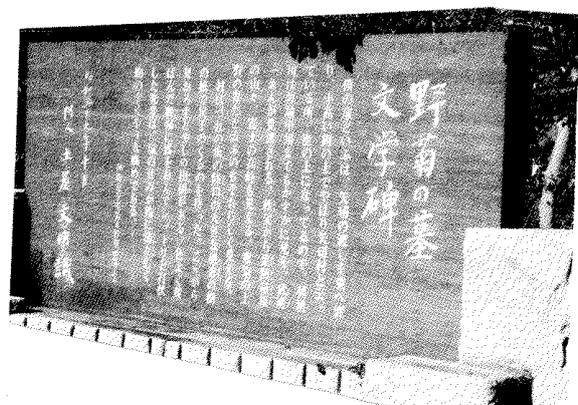


写真-16



写真-17

である（写真-16）。左千夫の処女作であり代表作となった「野菊の墓」は明治時代のこのあたりが舞台。十五歳の政夫と二つ年上の民子との悲恋物語で矢切の渡しも登場する。碑に書かれた「僕の家といふは、……」と書いているところは西蓮寺のあたりであり、遠く葛飾方向が見渡せる（写真-17）。「利根川は勿論中川までもかすかに見え」の利根川は今の江戸川のこと、そのむかし利根川の本流であったことの名残であろう。

帰路、付近を流れる坂川の欄干にも矢切の渡しを見つけた（表紙の写真）。歩き疲れた足を休めて江戸川端のベンチに腰掛けていると、セキレイがチッチッチという鋭い鳴声を残して頭上を勢いよく飛び抜ける。上空ではヘリコプターの風

切り音がバサバサと乾いた音をたてている。遠くの橋を渡る電車やおびただしい車列の風景は蜃気楼化し、音は都会の暗騒音に溶け込んでしまって無声映画の様だ。足の疲れも癒えて心休まる音風景にしばし身をゆだねていると、渡し乗り場に向かう観光ワッペンを胸につけたおじさんオバサンのおしゃべりで現実に引き戻され、それをきっかけに腰をあげて家路につく。

「つれて逃げてよ〜♪」と道々ついつい鼻歌を唄いながら映画・演歌・庶民文学と一直線に楽しんで広い川原で深呼吸すれば、気持ちのよい酸素が体内に充満する散歩路である。晴れた日にフーテンの寅さん気分、ふわりと訪れることをおすすめする。

（財団 江沢記）